

厚生労働科学研究費補助金
(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))
(総括・分担)研究報告書
精神科病院における転倒・骨折等の現状に関する調査
研究分担者 江口 研 大湫病院 院長

研究要旨

わが国の精神科病院に入院している患者の高齢化が進んでおり、精神科専門治療による精神状態の改善を図る治療だけでなく、身体合併症の管理、ロコモティブシンドロームの予防、QOLの維持は、今後の地域移行を推進するにあたり重大な課題である。高齢化により転倒による大腿骨近位部骨折は、日常的に非常に発生しやすい事故であり、転倒予防はセーフティマネジメント上で重要課題であるが、有用な事故予防の対策は確立していない。
本研究では精神科病院としての今日の医療水準から取り組むことが可能な実効性のある転倒予防・骨折予防対策、診断、検査、薬物治療について調査し、その多次元的な解決策を考察することを目的とする。

A. 研究目的

わが国の精神科病院に入院している患者の高齢化は進んでおり、精神科専門治療による精神状態の改善を図る治療だけでなく、身体合併症の管理、ロコモティブシンドロームの予防、QOLの維持は、今後の地域移行を推進するにあたり重大な課題である。高齢化により転倒による大腿骨近位部骨折は、日常的に非常に発生しやすい事故であり、転倒予防はセーフティマネジメント上で重要課題であるが、有用な事故予防の対策は確立していない。
本研究では精神科病院入院中の統合失調症患者の転倒、大腿骨頸部骨折の発生実態を調査し、骨粗鬆症などの診断、治療、事故後の整形外科との連携、転倒予防に向けた取り組みなどについて検討することにより、その多次元的な解決策を考察することを目的とした。

B. 研究方法

精神科病院入院中の統合失調症患者の転倒、大腿骨頸部骨折の前向き調査について、委員会を立ち上げ、調査方法、調査項目の検討し、公益社団法人日本精神科病院協会の医療安全委員会に所属している委員の病院に対してアンケート調査を実施する。

(倫理面への配慮)

調査対象が、訴訟に関わる場合もあるため、個人情報保護の観点に最も留意し、研究実験結果の公表に際しては個人の特特定が行えないよう配慮するとともに、データ分析時にも個人名が特定できないよう個人情報を管理する。

C. 研究結果

2018年4月1日から9月30日の期間の、75歳以上の統合失調症患者の転倒、骨折事例についての前向き調査を実施し、以下の結果が得られた。

公益社団法人日本精神科病院協会医療安全委員会に所属する12病院から、207例の回答事例があった。

207例のうち21例が骨折件数であった。

平均年齢は転倒事例が81.1歳、骨折事例が82.9歳であった。

④年齢構成では転倒事例、骨折事例とも75歳から

80歳が最多で、それぞれ51.7%、47.4%であった。

男女比は、転倒事例が男性40.8%、女性59.2%、骨折事例で男性47.4%、女性52.6%であった。

体型構成では男性の転倒事例でBMI18.5未満39.0%、18.5~25が54.2%、25以上が6.8%、骨折事例ではそれぞれ37.5%、62.5%、0%であった。女性の転倒事例はBMI18.5未満31.4%、18.5~25が60.5%、25以上が8.1%、骨折事例ではそれぞれ70%、30%、0%であった。

入院日数は、転倒事例の平均が2664日、骨折事例で2776日であった。

入院病棟を機能別で示すと転倒事例では精神療養病棟44.2%、認知症治療病棟25.9%、精神病棟入院基本料25.2%であり、骨折事例では精神療養病棟31.62%、認知症治療病棟31.6%、精神病棟入院基本料31.6%であった。

主な身体合併症は糖尿病、高血圧、高脂血症、心不全、狭心症、パーキンソン症候群、脳梗塞後遺症、骨折の既往等であった。

GAFスコアの構成は、転倒事例では30~21が50.6%、20~11が25.3%、40~31が14.5%と続き、骨折事例では30~21が61.5%、20~11が15.4%、40~31が7.7%を占めた。

転倒事例で14.3%、骨折事例で36.8%が骨粗鬆症と診断され、骨密度測定検査が転倒事例の12.8%、骨折事例の47.4%に実施されていた。

転倒事例の17例、骨折事例の8例にDEX法の骨密度が測定されており、YAMの平均値は、それぞれ65.4、70.3であった。

転倒事例の90.5%、骨折事例の89.5%で転倒リスクアセスメントが実施されており、それぞれ最高危険度の以上が占める割合は、51.4%、28.6%であった。

転倒事例の86.4%、骨折事例の84.2%で転倒の既往があった。

転倒事例の19.0%、骨折事例の26.3%で骨折の既往があった。骨折部位としては大腿骨頸部がそれぞれ50.0%、80.0%で最多であった。

主な転倒予防策としては、看護計画、向精神薬調整転倒リスク共有化、車いすの利用、机・椅子の位置調整、センサーマットの使用、OTによる訓練などが挙げられた。

転倒状況は転倒事例では歩行時が53.9%、立

ち上がり時が 15. %、骨折事例ではそれぞれ 42.1%、36.3%であった。

転倒場所は、転倒事例で居室 43.7%、食堂・デイルーム 23.8%、廊下 17.2%、トイレ 6.0%であり、骨折事例ではそれぞれ 40.0%、15.0%、15.0%、15.0%であった。

転倒時間は転倒事例で、9時から17時 32.9%、17時～1時 32.9%、1時～9時 34.3%であり、骨折事例ではそれぞれ 41.2%、17.6%、41.2%であった。

D . 考察

統合失調症患者の転倒、骨折事例についての前向き調査から得られた結果から、精神科病院では高齢化が進み、今後転倒による骨折等の受傷患者は益々増加することが推察された。骨折や骨粗鬆症が地域移行のマイナス要因となり、長期入院患者の地域移行や退院促進のためにも、対策を講じることが重要かつ有用であり、高齢化する患者に対してロコモティブ症候群の予防によりADLの維持をはかり、生活の質の向上に取り組み、不必要な期間の入院を防ぐことによって、地域在宅へ早期に移行することが期待でき、ひいては医療費の抑制に寄与すると考える。

E . 結論

統合失調症患者の転倒、骨折事例についての前向き調査から精神科病院における統合失調症患者の転倒による大腿骨近位部骨折事例について転倒および骨折リスク、その他背後要因、転倒リスク評価、転倒予防策等を調査し分析検討した。今後さらに、転倒および大腿骨近位部骨折予防について精神科病院としての今日の医療水準から取り組むことが可能な有用な転倒予防・骨折予防対策、診断、検査、薬物治療、理学的療法について検討を深め、その実現に向けて多層的考察が必要である。

G . 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H . 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む.)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

